

2010年8月15日（日）「創造の初め——闇に光を——」

創世記1章1～5節

1 初めに、神が天と地を創造した。2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

【序論】 聖書の第一福音書

創世記は、「聖書の第一福音書」と呼ばれることもあります。今回、この長大な書に取り組もうと心を決めたのは半年ほど前のことでした。それには幾つかの理由があります。第一に、これまで当教会では、あまり旧約聖書を学んで来なかったこと。第二に、イエス・キリストの到来の意味を知るためには、聖書を頭から読む必要があるということ。第三に、倫理観が歪み大自然の脅威が人類に迫ってきている現代を神学的な視野をもって捉えていく必要があると感じているからです。そのためには、世界の最初の「良い状態」と、人間の罪を契機として始まった「悪い状態」とを学ばなくてはなりません。「天地創造」の記事を読み進めてまいりますと、万物が「人間」を中心として創られていることに気づくことでしょう。神が人類を愛し、人類のために被造物を備え、それを与えてくださる。しかし、人類はいとも容易くその愛を踏みこじっていく。「お話にならない墮落と背反」(小畑)。ところが、そんな人類に直ちに与えられる赦しと救いの約束。この書物が「聖書の第一福音書」と呼ばれる理由を、しっかりと掘み取りたいと思います。それでは、創世記の幕開けです。

【本論】

本論1. 神が前提にある世界

初めに、神が天と地を創造した。(1:1)

シンプルな書き出しです。ここでまず前提とされていることは、神の存在です。聖書

は、「神は存在するのかもしれないのか」などという議論は致しません。ただ、「**天と地**」(=万物)を創造したのは神であると語るのみ。この言葉をもって、聖書は「神が支配し給う世界」という新しい世界観の下へと読者を招き入れます。これは、祝福への招きです。何故なら、私たちはそこに、この世界が無目的に動いているのではなく、神の目的に向かって進んでいることを知るからです。

古来より、あらゆる宗教や哲学が、人類の起源を問い、宇宙の発端を知ろうとしてきました。日本にも、『古事記』『日本書紀』という優れた文学があります。『日本書紀』が国家としての正式な歴史書(正史)として成立したのは、紀元720年(奈良時代)のことでした。その冒頭にこうあります。

「古^{いにしえ}に天地未だ別れず、陰陽^{あめつち}分れざりしとき、渾沌^{め お}れたること鶏子^{まるか}の如くして、溟滓^{とりのこ}にして^{ほのか}溟滓^{きざし}にして^{きざし}牙^{きざし}を含めり。」(昔、天地が未だ分かれず、陰陽の対立も未だ生じなかつたとき、渾沌として鶏の卵の中身のように形定まらず、ほの暗い中に、まずもののきざしが現れた。)

ここで前提とされているのは「渾沌」です。「渾沌」から万物が生じたと『日本書紀』は語ります。しかしここに、「では『渾沌』の起源は何か？」という疑問が生じてくる。それについては何もふれられておらず、先ず「渾沌」が存在し、その中に葦の若い芽のようなものが生まれ、それが「神」になったと続きます。創世記の語り出しと似た面がありますが、見逃すことができないのは、神よりも先に渾沌があったと『日本書紀』が語っている点です。

一方、聖書はすべてに先立って神がおられたと語ります。これは、決定的な価値観の転換をもたらす言葉ではないでしょうか。すべての存在の源は、渾沌ではなく、「神」という人格的存在に帰せられる。そうしますと、私たち人間もまた、神によって創られ、神の目的の下に生かされている存在だということに繋がってくるのです。

1節は、言わば「見出し文」。2節以下に創造の御業の詳細が描かれていきます。

地は茫漠として何もなかった。(1:2a)

ここで言われている「地」とは、1節の「**天と地**」が万物を指していたのとは違い、「地球」を意味します。地球は当初どのような状態にあったか。新改訳第三版になって、「茫漠」という表現が用いられるようになりました。第二版では、「地は形がなく、何もなかった」とされていたところを、そのとりとめのない無秩序な状態をより明らかにすべく、「茫漠」に直したのでしょう。このように、創られた当初の地球は、良

い状態ではなく、荒れ狂っていました。まだ何の^{いのち}生命も供給することのできない、秩序のない状態であります。しかし、ここに既に太古の海の原型らしきものがあることも分かるでしょう。

やみが大水の上にある (1:2b)

「大水」(=海になる前の状態の大量の水)は、荒れ狂い、吼え猛っていました。しかも、「闇」が覆っていたとも。闇とは、聖書を通じて、神に対立する存在として描かれております。それは救いを必要とした状態とも言い換えることができます。救いとは、秩序のないところに神がご介入なさること。私たち人間も、放っておけば、この世の乱れた倫理に埋没し、心も廃れていくでしょう。

一人の青年が、あるときフラッと牧師館を訪ねてきました。話しを聞いていますと、東京の大学に進学して地方から出て来られたそうです。しかし、親から離れ、何の制限もなくなったところに、どこまでも転げ落ちて行くような生活の乱れが待ち受けていた。未成年でありながら酒、煙草が手離せなくなり、しまいには麻薬にまで手を出しつつあるという、危険と背中合わせの生活をしていることを聞きました。私はひたすら、「君に必要なのは神の真理の言葉だ」と訴え続けました。聖書を通して語られる神の言葉によって、人は変えられるからです。混沌とした地球もまた、神が御声をかけ、救いをもたらして下さることを待ち望んでいました。ここに、既に救いの御業の片鱗のようなものが見えています。

神の霊が水の上を動いていた。(1:2c)

これは、創造の御業を始めようと、神の霊がそこに待機しておられる状態でしょう。この混沌の中にある唯一の希望。神のご介入によって、闇は打ち破られるのです。

本論 2. 光と闇の区別

神は仰せられた。『光があれ。』すると光があった。(1:3)

最初の創造の御言葉は「光があれ」でした。何故、光が必要であったか。それは、神がお創りになられたものが、目に見えなくてはならなかったからです。神の御業の特徴は、先ず言葉があり、そしてその言葉の通りに成るということ。

神は光を見て良しとされた。(1:4a)

この時点では、まだ光が照り輝いただけで、未だ世界は混沌としています。しかし、

それにも拘らず、神は「良い」と評価を下される。この「良い」という言葉は、創造の記事において特に重要でして、これから「大空」(10節)、「植物」(12節)、「天体」(18節)、「魚と鳥」(21節)、「野の獣」(25節)が創られていくにあたって、すべてに対して下されている評価です。そして人間の創造の後、結論として、31節の「**神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった**」という言葉が置かれます。

神は光とやみとを区別された。(1:4b)

「**区別**」は、創造の記事の中のもう一つの重要なテーマです(6, 7, 14, 18節)。区別は差別ではなく、それぞれに与えられた役割を果たさせることを意味します。神の御心のために機能させるということ。つまり、「良い」のは光だけではなく、闇もまた「良かった」のです。私たちは「闇」と聞きますと、悪いイメージばかり想像するのではないのでしょうか。「夜の闇に紛れて・・・」とか、「心の闇」とか。暗い部分において、人間は悪を行なう。しかし、当初この闇さえも、神の御心のためにのみ機能していたということが分かります。

神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。(1:5)

古代世界において、「名前を付ける」ことは、付ける者がそれを支配し、所有することを意味しました。即ち、神が完全に光と闇とを支配しておられたので、それらはどちらも神に属する「良いもの」だったのです。

本論 3. 一日が闇から始まる理由

さて、今日はまだ創造の最初期の段階ですが、少し先取りして考えてみたいと思います。これらのものは、一体誰のために創られているのでしょうか。神は無目的に創造の御業を進めておられるのではありません。天地創造は六日かけて行なわれます(「六日」の捉え方については、次回)。その最終日に創られるのが人間です。しかも、人間は「神のかたち」として創造されるという、特別な恩恵にあずかっていることが分かる(1:26~27)。よって、天地創造は、神の人類に対する愛の現れだと言うことができます。お創りになったすべての「**良きもの**」を人類に与え、それらによって祝福することこそが、神の目的だったのです。

31節では、創られたすべてのものが「**非常に良かった**」と言われています。しかし、注意して読むべきことは、この「**良かった**」という言葉の中に、将来悪くなる可能性

が隠されているように聞こえることです。創世記が書かれた時には、既にこの世界の秩序は乱れ、歪んだものとなっていました（創世記の著者は伝統的にモーセ（前14世紀）だと言われている）。それは、人間の罪の結果です。罪を犯したアダムに対する神の宣言をご覧ください。

また、人に仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。」（3:17～18）

神が与え給うたすべての「良きもの」を、人類は正しく管理していく責任があります。しかし、人類は欲望をコントロールできなくなり、己の利益を満たすために無茶な生産を始めました。明らかに必要以上のものを搾取し、浪費に浪費を重ねている今の世であります。この浪費は、土地に負担をかけます。近年問題となっている環境汚染、気候の大変動。そして、この終戦記念日のたびごとに思い起こす、核兵器による被造物の大破壊。人間が地のすべてのものとの「共生」の責任を棄てて、それらを乱暴に扱っている結果、様々な生き物の生態系に異変が生じ、大自然がうめき苦しんでいるのです。しかし、神の恵みは人の罪を覆い続けます。

夕があり、朝があった。第一日。（1:5b）

一日の単位が、夕で始まっていることにご注目ください。私たちの一般的な感覚では、一日は夜明けと共に始まり、夕暮れと共に終わるのではないのでしょうか。しかし、ここでは一日が夕方から始まり、朝で終わっているのです。これは、闇が光に追い散らされて、一日が終わることを意味します。混沌の暗きに光が照る。神の創造の御業は、暗いところから徐々に明るくなっていくという順序なのです。

このことは、私たちの人生にも適用されるべき希望の言葉ではないでしょうか。人の人生は、言わば暗いところから始まると言っても良い。すべての人間が罪を抱えて生まれ、混沌の内を歩んで行く。知らず知らずのうちに周囲を毒し、周囲に毒されながら生きている私たちであります。しかし、この人生に神が介入しようとしておられることを今、知ろうではありませんか。「**神の霊が水の上を動いていた**」とありますように、神が私たちの混沌を打ち破ろうと、備え、そこに待っておられる。そして、「光あれ」という御声が発せられる時に、私たちの内に真理の光が照り輝くのです。

【結論】 神のご介入を待ち望め

この光とは、イエス・キリストご自身の栄光だと言ってもよいでしょう。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。

(ヨハネ1:1～5)

生まれながらにして闇と混沌の内を歩んでいる私たちに、一条の光が差し込んでいます。それは「神の言葉」です。この創造主なる神は、まことに「善い方」でありますから、如何なる悲惨な状況をも益に変えることがおできになるのです。この方に信頼を置いて歩んでまいりましょう。

【祈り】

創造主なる神よ。混沌を打ち破るあなたの御声は、この地上にも、私たちの心にも、投げかけられなくてはなりません。私たちがその御声を喜んで受け取り、混沌と闇を愛し続けるようなことはありませんように。神の創造の摂理と御心に従って生きる者とさせて下さい。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人類を愛し、祝福を与えるため、すべての被造物を秩序正しく創造し給うた、父なる神の愛、

聖なる御声をもって、地の暗きを打ち破り、人の心の闇をも、ご自身の栄光で輝かせ給いし、主イエス・キリストの恵み、

万物の創造主にして、新しい人格の創造主となり給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。